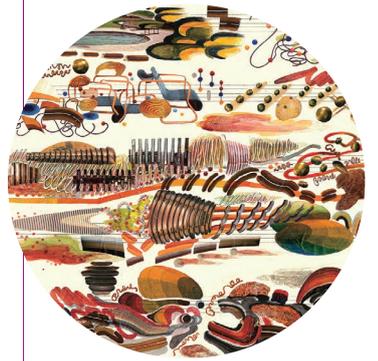


02

インタビュー 小指

自分の内側の世界を
守り、育て続けたい。



特集

私にとって意味のある哲学

06

「インタビュー」「哲学とは死の練習」。

死はあくまでも哲学の独自の領域として残り続ける。／佐々木中さんに聞く

11

「対談」高井ゆと里×内記 洸

他者のために生きる自己か、そうではない自己か。

16

世界への問い／藤高和輝

20

あいまいな直感を描きなおす／西條玲奈

連載

キッチン菜時記／飛田和緒

きのうのあしもと、あすの空／文＝上本賀代子 絵＝鈴木千佳子

真宗と大拙と私／池田向一

唯信鈔文意を読む——唯念仏のころ／山田恵文

出会いの真実——嘆仏偈を読む／宮下晴輝

ペコロスのほどけてしゃがんで／岡野雄一

息でできる風景／森泉岳土

歌壇／永田淳 俳壇／安原葉

同朋のひろば

40

仏事作法のひとつこま／近松誉

どうぼうパズルdeひとやすみ

録音から立ち現れる 東本願寺の「音景」／柳沢英輔

古写真でつづる東本願寺

あなたのとりの僧侶

哲学者と僧侶／中山善雄

一切の幸せ／作＝岩川ありさ 絵＝惣田紗希

生きづらいこの世界でも／竹田ダニエル

日々平熱のソウル／中田亮



表紙絵
北村人
絵本作家&イラストレーター



小指さんが所属するバンド「小さいテレーズ」の曲「日常の彼方」をもとに制作した絵。五線譜紙に音楽を再現するシリーズ「スコア・ドローイング」のひとつ。（「日常の彼方」はQRコードより聴けます）



自分の内側の世界を守り、育て続けたい。

こゆび
小指（画家、漫画家、随筆家）

五線譜紙上に音楽の「情景」を描く画家、「失敗ばかりの旅」を綴った漫画の著者、平凡な日々の「奇跡」を記録する随筆家。さらにドラマーという、色んな顔を持つ小指さんの世界。これまでの歩み、仲間の依存症のこと、表現活動における思いなどをお聞きしました。

自分自身を助けること

——ペンネームの由来は？

漫画と随筆を書く時は「小指」、画家としては本名の「小林紗織」という名義で活動しています。「小指」というペンネームは適当につけたのですが、思いのほか浸透してしまい、引っ込みがつかなくなってしまう。昨年出版した『**偶偶放浪記**』は、旅行記ものです。お金をあまり使わずにあちこちをのんきに旅している話ばかりを書いています。実はあの当時、パートナーと、バンドメンバーの親友という、彼ら二人のアルコールの問題が一番大変な時期でした。そんななかで彼らと息抜きに出かけた束の間の思い出が『偶偶放浪記』なんです。

彼らの依存症の症状に振り回されて、プロでもないのにケアする。気がつけば私は「介助者」として生きていました。当時は朝昼晩深夜とバイトを掛け持ちし、時間も足りなく、ろくに絵も描いていませんでした。自分も最初は表現を志していたはずなのに、「なりたい」と思うだけでは何にもなれない。そんな当然なこ

とに気づいた頃には、もう二十代半ばになっていました。

依存症のことを調べていくと、共存など、私自身の問題にも行き着きました。ある本に「依存症の傍らに在る人間の特徴」として書かれていたのは、まさに私そのもの。必死に相手を治そうと奔走して、自分の感情より相手のことばかり考え、自己犠牲的に尽くす。それまでの自分の行動がすべて症状として書かれていました。でも、そんな「なぜ？」という感情を自分の言葉で紡ぎなおすと、「そういうことだったのか」と腑に落ちる。その結果生まれたのが、『宇宙人の部屋』という当時のことを書いた一冊です。この本を書かなかつたら、今もすごく苦しいままだったと思います。

——『宇宙人の部屋』に「私が自分自身を助けることで周りの世界がどう変わるかが知りたい。知りたくてたまらないから、今こうして書いています」とあります。

依存症の家族会で求めた冊子に「私は自分自身を助けることがどのように彼を助けるのか知りたい」という一節があり、すごく腑に落ちた

んです。それまで読んだ依存症の本は、当然ですが依存症当事者の人が主語になることが多く、傍らに在る私みたいな人間がそればかり読んでいると、自分自身がますます希薄になり、気づいたら「彼らを治したいだけの人」になっていました。

本に書かれている「依存症者への対応の仕方」も、言葉の通り真似しただけでは当然うまくいかない。病院へ連れていってもダメ、自助グループへ連れていってもすぐ行かなくなる、言うことも聞かない……と相手に働きかけることはすべて手を尽くしてしまいました。だから「私は自分自身を助けることがどのように彼を助けるのか知りたい」という言葉を読んだ時、それまで視野狭窄に陥っていた視界が広がり、突然見渡せるようになった。

よく考えたら彼らから一度も「助けてほしい」なんて言われたことはなかったし、私が振り回されに行っていただけなのかもしれない。そのうえで「自分自身の助け方ってなんだろう」と考えた時、「優秀な介助者になるんじゃないか」と思いました。

本当に命が危ない時だけさっと手を伸ばせるようにして、普段は「何が起きても私のせいではない。私のことを残すだけ」と自分に言い聞かせて制作を始めました。その時に一番役に立った本が、信田さよ子先生の『タフラブ 絆を手放す生き方』です。そうやって自分の時間を作っていたら、少しずつ自分のことを俯瞰できるようになりました。

——『宇宙人の部屋』には「自分自身のこと」が「一番『謎』で仕方がなかった」ともあります。

普通の人にはきつと途中でおかしいなと気づくのに、こんがらがりがすぎて人の問題まで背負うようになって、自分のことも周囲もすっかり手に負えなくなっていました。今もまだ、たくさんの謎を抱えているところですよ。

音楽を五線譜に描く

——本名名義で制作している絵について聞かせてください。「音楽を聴き、浮かんだ情景を楽譜の概念無く譜面に描く試み」という「スコア・ドロー

インタビュー

「哲学とは死の練習」。

死はあくまでも哲学の独自の領域として残り続ける。

佐々木中^{あた}さんに聞く

なぜ「死」が哲学の最も重要なテーマなのか

——昨年11月に出版された『万人のための哲学入門』（草思社）を拝読しました。この本では、巻頭の序文で、誰にでもあてはまる確実なこととして「あなたが死ぬということ」を挙げ、「私たちの哲学入門は、ここから始まります」と書かれています。つまり、哲学の出発点にまず「死」というテーマを置かれているわけですね。

佐々木さんは、最初の著作である『夜戦と永遠』（河出文庫）でも、第一部の最後あたりで、ハイデガーやブランシヨ^{*}の文章を引用しながら「死」についての緻密な考察を

繰り返していました。そこから見ても、「死」は佐々木さんにとってとても大切なテーマではないかと思われるのですが。

*モーリス・ブランシヨ：1907～2003年。フランスの批評家、作家。

私に限らず、哲学にとって死というのは非常に重要な問題です。もし仮に、今後すべての人文系の学問が科学に回収される時が来たとしても、死の問題は哲学の領域に留まり続けるでしょう。なぜなら、「心肺機能や脳機能が停止したからこの人は死んだ」といった客観的な死というのは他者が認めることであって、「自分の死」というのは客観的に扱うことができないものです。ソクラテスは「哲学とは死の練習」と語っ

ていますが、死はあくまでも哲学の独自の領域として残り続けると思います。

——私たちは、人間は誰でもいつかは死ぬということを知識として知っています。しかし、それは他ならないこの「私」が死ぬのだということを普段は忘れていて。しかもその死はいつやってくるかわからない。いまこうして話している瞬間にも死は訪れるかもしれない。でも、そんなことは考えないようにして日常を生きています。そんな私たちの生き方を、ハイデガーは非本来的な現存在の在り方だと捉えた。そして、本来的な在り方を生きることがハイデガーにとっては重要だったのでしょうか。

佐々木さんの本にも書かれているとおり、

私自身が死ぬことは誰にも代わってもらうことができません。しかし、にもかかわらず、

私たちが体験するのは常に他人の死であって、自分が死んだときにはもう意識がないわけですから、自分の死というのは自分では体験できないわけですね。

——そうです。自分の死というものは、実は自分にとって確実ではない。そのことを非常に明晰に示したのがブランシヨです。

しかし、「死は確実であって、生は限りあるものだ。だからこそ、残された生、そして死を大義のため、あるいは国家や民族のために捧げなくてはならない」といった言説は古今東西、いつも言われてきました。これを私は「死の搾取」と呼んでいます。国家が人々に犠牲を求めるために繰り返し使ってきた言説なんですね。

ハイデガーもまた、死は確実であるということを明示したうえで、われわれが本来的な存在として死と向き合うのは「民族」の命運なのだ、これまで緻密に積み重ねてきたロジックを一気に吹き飛ばすようなことを言い出してしまふ。それはやはり死の搾取につながってしまうような言説です。そして、そのロジックに対して風穴を開けるように、「自分の死は、実は自分にとっ

て確実なものではない」と論じたブランシヨの考え方はとても重要だと思います。

「儀礼」によって主体が形成される

——私自身の死は、自分では体験できない。つまり自分の死は、自分だけでは完了することができない。必ず誰か他人に目撃され、認められなければ、私が「死んだ」ということにはならないわけですね。ということは、私の死とは非常に固有名詞であるにもかかわらず、ある意味では共同のものでもある。それが、「葬礼」というものがなくならない理由だと書かれています。

ええ。葬礼というのは、人間を人間たらしめる本質のひとつだと思います。人類史的な規模で考えれば、すべての芸術は葬礼から始まっていると言ってもいい。昔の人々が文化を持っていたかを調べるには、まず遺跡を発掘して墓を見つけ、そこに様々な副葬品が死者と共に葬られているのを見て、初めてそこに文化があったことがわかる。おそらくそこでは葬祭が行われ、歌やダンスや祈りが捧げられたことでしょう。そうした人間の文化や芸術といったものは、葬

礼という形で受け継がれてきたわけです。弔いの儀式をするのは人間だけです。その他の動物は、仲間の死を悲しむことはあつたとしても、遺体は置き去りにして行ってしまう。人間以外に埋葬や葬儀をする動物はいません。

仮に、自分に近い人が死んでも、その遺体を生ゴミに出していいという社会があったとしたら、それはもう人間の社会ではありません。人が死んだら、ちゃんと葬礼する。それが人間の社会なのです。ところがナチスは、アウシュビッツで大勢のユダヤ人を殺しておきながら、葬礼もせずただ死体処理をただけだった。あれこそがまさに野蛮な社会なんですね。

——ナチスのみならず、日本が戦時中にしたことも同様ですね。また、葬礼に限らず、佐々木さんは「儀礼」というものに非常に重い意味を持たせています。「儀礼の問題」という章では、儀礼は教育であり、「感性的な反復によって主体を形成する」手続きであると書かれていますね。さらに、面白いことに、「儀礼には「眼差しの交錯」が必ず「見られる」身体になるといふことが書かれています。だから、お葬式でもなん

他者のために生きる自己か、 そうではない自己か。

対談 高井ゆと里 × 内記 洸

私たちがそれぞれ「私」の生を生きているとはどのようなことか。
ハイデガーを研究する高井さんと、キルケゴールを研究する内記さんの対談です。

車座で分かち合う哲学

内記 ご著書『ハイデガー 世界

内存在を生きる』（講談社）を拝読しました。「20世紀を代表する哲学書」とも言われるハイデガーの『存在と時間』ですが、この難解な書が、実は私たちにとって非常に身近な問いによって導かれていくのだと、高井さんは言われます。すなわち、「私たちがそれぞれ「私」の生を生きているとはどのようなことか」と。

一方で印象的だったのは、高井さんが非常に「読み手」を意識されている点です。何気ないことですが、冒頭には「読者と分かち合う」という言葉が何度も出てきます。『存在と時間』を読むということそのものに、書き手・読み手の関係を超えて何か大きく拡がるものがあった、それを社会と分かち合うことになる、と強く主張されているように思ったのですが。

高井 言われてみると確かにそうですね。一般に、哲学の古典を読むことは楽譜の演奏に喩えられたりします。楽譜（過去に書かれた

古典）が、演奏する人（解釈者）を通して、聴衆（読者）に伝わるのだと。ただ、私は少し違うイメージを持っていきます。

私はクリスチャンの家庭に生まれて、祖父が牧師なのですが、教会では「みんなで聖書という同じ本を読み、みんなでその解釈を聞く」ということが行われます。この場合、楽譜⇄演奏者⇄聴衆という三者関係ではなく、書かれたものの周りにみんなが集まり、その内実を分かち合う関係性になる。哲学の古典を読むことにも、そういう「礼拝」に近いイメージを持っています。

内記 テキストを中心に、そこに集まる私たちの間には、語学力や読解力など様々な違いはあるけれど、共に向き合うことができるわけですね。「聖書」と「哲学の古典」で内実の違いがありますが、向き合い方

には共通点があるということでしょうか。

高井 基本的にはそう考えています。何年もの間、様々な人が様々な場所で読み継いできた書物を前にして、私はその歴史に連なる一読者に過ぎない。なので、私の本の読者にもその輪と一緒に参加してほしいと思っています。「私があるってどういうことだろう」という問いを、みんなで考えていくことはできるわけです。

内記 ああ、一人ひとりがそれぞれ「私」として参加するわけですね。

高井 もちろん。いつも一人で考

違和感を言葉にする

内記 『存在と時間』の導入部分って、改めてとても象徴的ですね。哲学という営みには非常に長い歴史がありますが、ソクラテス

やプラトン以降の哲学において、「存在の問い」がきちんと提出されてこなかった。だから、これを改めて問わねばならないのだ、とハイデガーは言う。

私たちは日頃、どこそこに「何々がある」とか、「誰々がいる」とか言っているわけですが、この「ある」とか「いる」——つまり「存在」とはどういうことなのか、実は理解していない。それなのに特別、困っているわけでもない。こんなふうは何より当然だと思われることこそが、逆に最も「問われるべきこと」だと言われるわけですね。

「仏教の始まりにも『問い』があったそうです。シッタールタという若者は、人が老い、病み、死んでいく「老病死」という、言わば当たり前の事実にはひどく衝撃を受け、「嫌だ！」と思った。しかも、その強烈な嫌悪感がどこから来るのか、自分にはきちんと答えられない。本来、問われなければならなかった問いが非常に身近で具体的なものとして立ち上がったわけです。

高井 面白いですね。ハイデガーの哲学には、基本的に二つの水準があります。一つは学問的な水準、もう一つは学問以前の「これって気持ち悪いよね」という水準です。

『存在と時間』を書いた頃のハイデガーによると、プラトンやアリストテレス以降、ほぼ全ての哲学者は学問的な水準ばかり得意になって、自分の経験として本当に腹落ちすることがないまま、議論を重ねてきた。なので、プラトンなどが問いを前に「動揺」した、その最初の気持ちを共有せず、本当の問いを見失った、と言います。

実は『存在と時間』は未完の書です。当初の構想では現状の三倍程度になるはずが、結局できなかつた。ハイデガーが『存在と時間』全体を通じて共有しようとしたのは、存在の問いが歴史的に忘却されてきたこと自体が「本当に気持ち悪いことだよ」という違和感だったのではないかと私は考えています。これまでの宙に浮いた議論が腹に落ちて、プラトンが言っていた、あの気持ち悪さに

読者を誘うことが最終ゴールだったのではないかと。ともかく、学問以前の実感と学問は一つでなければならぬということ、ハイデガーは強く主張しています。

「私」というテーマに関しても同様です。抽象的な議論はいくらでもできますが、「問いに動揺させられている私」が欠けてしまう。

この動揺は、ハイデガーの言葉でいえば「不安」です。「私は明らかに私でしかないのに、私って何だろう」という気持ち悪さ。あるいは、「私は世界に存在してしまっているけど、世界があるってどういうことだろう」という驚き。これらの違和感を突きつめ、徹底化することで、哲学の議論が可能になるのです。自分が今感じている不安を吐き出して、言葉や理論にするとうなるのか。それが哲学だとハイデガーは信じているんですよ。逆に言えば、それ以外は哲学の本質ではない。こんなふうには非常に冷静ですが、ハイデガーはとても熱のある人です。

内記

正直、初めて聞きましたよ。『存在と時間』というあの壮大なプランの終着点が、まさに違和感を共有することにある、なんて。「何か変だ」という具体的な実感からこそ哲学は始まり、ハイデガーはまさにその違和感を問いとして徹底的に仕上げることを課題としたのだ、と。

高井 本当にそうなんです。問いがうまく立つなら、答えへの道筋はほとんど付いているとハイデガーは確信していたはず。問いを立てることが哲学の第一歩だと。ただ、その問いをきちんと立てることが本当に難しい。問いを立てるより、与えられた答えに近づき、安易な目標を達成することに私たちの思考は向きがちですから。

〈ひと〉における支配と快楽

内記 「問い」ということに關して、もう一点。ご著書では、一般



たけのご飯

走り雨のあとに届くたけのこで
作る炊き込みご飯。

レシピ・文=飛田和緒
1964年生まれ。料理家。素材の味を引き出すシンプルで簡単、おいしくできるレシピが人気。数々の著書を出版し、雑誌やテレビで活躍。
撮影=天日恵美子



アレンジ
その①

若竹煮 (作りやすい分量)
ゆでたけのこ(穂先も含めて150g)を少し大きめに切り、だし(1カップ半)と塩(少々)、薄口しょうゆ(小さじ1/2)を合わせて火にかけて、沸騰してきたら落とし蓋をして15分ほど弱火で煮て、火を止めてそのまま1時間ほど冷ます。わかめ(水で戻したもの30g)を一口大に切って水気をしぼって、たけのこに合わせてひと煮し、器に盛り付け、木の芽をあしらう。



アレンジ
その②

焼きたけのこ (2人分)
ゆでたけのこ(根元に近い部分100g)を7、8ミリくらいの厚みで食べやすい大きさに切る。実山椒の佃煮(小さじ1)を粗くたたいてオリーブオイル(大さじ1)と混ぜておき、こんがりとお網焼き(写真下)したたけのこに適量かける。



たけのごはん

材 料
(作りやすい分量)
ゆでたけのこ……………150g
にんじん……………小1/2本(50g)
油揚げ……………1枚
米……………2合
塩……………小さじ1
薄口しょうゆ……………大さじ1
だし……………400ml くらい

作り方

- ① 米は研いで炊飯器にセットし、メモリのところまでだしを注いで30分ほど浸水させる。
- ② ゆでたけのこは食べやすい大きさの薄切りにし、にんじんは2センチ長さの細切り、油揚げは1枚に開いて5ミリ角くらいに切る。
- ③ ①に塩と薄口しょうゆを合わせてひと混ぜし、②をのせて炊く。
- ④ 炊き上がったら十分に蒸らして軽く混ぜる。

ゆでたけのこの作り方

掘りたてのたけのこは皮をむいて、縦に半割にしてかぶるくらいの水とひとつかみの米を入れてゆでる。大きさにもよるが、1時間ほどゆでて、硬い部分に串を刺してやわらかくなっていたら火を止めて(写真下)そのまま冷ます。完全に冷ましたら、たけのこだけ取り出してさっと洗い、かぶるくらいの水と合わせて一晩冷蔵庫で保存してから料理にとりかかる。ゆで汁で冷ます、水につける。このふたつの工程をふめばえぐみがとれる。



しょうまん
小満

=5月21日頃=

やわらかな若葉がいつきに力強く伸び、緑が深みを増して、地表から何か目に見えないエネルギーが満ち溢れる。そんな時季に地面からニョキニョキと頭を出すのがたけのこ。毎年友人宅の裏山で掘ったたけのこをいただくのですが、「走り雨」のあとが掘りやすいから雨のあとに届けるね」と言うのです。「走り雨」とは本格的な梅雨の前にごずつく天気のことを指す言葉で、それを耳にすると、「あー、たけのこがやってくる」と心踊ります。皮をむいて、鍋に入る大きさに切り、米をひとつかみ入れて水からゆでます。



旬野菜
たけのこ

